

# 左京六条二坊の調査

—第133-7次

## 1 はじめに

本調査は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の収蔵庫建設に伴う発掘調査である。調査地は1985年に当調査部の新庁舎建設予定地でおこなった発掘調査地（第45次調査区、『藤原概報16』）の北に接する部分で、発掘面積は343m<sup>2</sup>。このうち東約3分の1の72m<sup>2</sup>が第45次調査区と重複している。調査期間は9月4日～10月25日。

## 2 検出遺構

層序は上層から盛土・表土・茶褐色土で、茶褐色土は中世以降の層と考えられ、瓦器を含み、その下に弥生時代末から古墳時代初めの遺物を含む層がある。

弥生・古墳時代初めの遺物を含む層は、南西方向に低くなる傾斜面をもっており、調査区西南の低部に堆積した最上層が灰褐色砂質土、その下が明灰色砂質土、次に暗褐色砂質土・暗茶褐色土・淡茶灰色土・暗褐色粘質土の順で斜め方向の上下に堆積している。上述の土層のうち、最下層の暗褐色粘質土中にも、弥生土器片を含んでいる。発掘調査では、低い西南部に堆積した土層を完掘し、その下の明灰色砂質土・暗褐色砂質土・暗茶褐色土の上半部を掘り下げたため、遺構図では西南部から東南部へ斜めの溝が走っているように見えるが、これは溝ではなく、東北方向から南西方向へ土層が斜めに堆積していることを示している。

弥生時代末から古墳時代初めの遺構としては、SD

9952とSX9953がある。SD9952は幅40cm、深さ30cmの細長い斜行溝である。SX9953は、この斜行溝SD9952を切り込むかたちで土器の壺底部が据え付けられた状態で残っていた。

藤原宮期の遺構としては南北塙SA4170がある。柱間寸法は2.1m（7尺）等間。第45次調査区では、南北塙SA4172と柱筋を揃えて重複しており、それより新しい。SA4170の年代的位置づけは、第45次調査と第47・50次調査（『藤原概報17』）では異なっているが、少なくとも東西大溝SD4130より北では、SA4170は6間分検出し（第45次調査）、7間から11間分が未調査で、本調査では12間目を検出したことになる。北側の柱穴には径14cmの柱根が残っていた。SA4170は土坑SK9950を切っているが、SK9950は第45次調査で検出したSA4172とは7尺等間で割ると、想定位置とは完全にずれることとなり、SA4172がどこまで北に延びるかは未発掘地を調査しないとわからない。

## 3 まとめ

藤原宮期の遺構は全体的に希薄で、南北塙SA4170の北端を検出したのみであり、これより北方には延びないことを確認した。

（山崎信二）

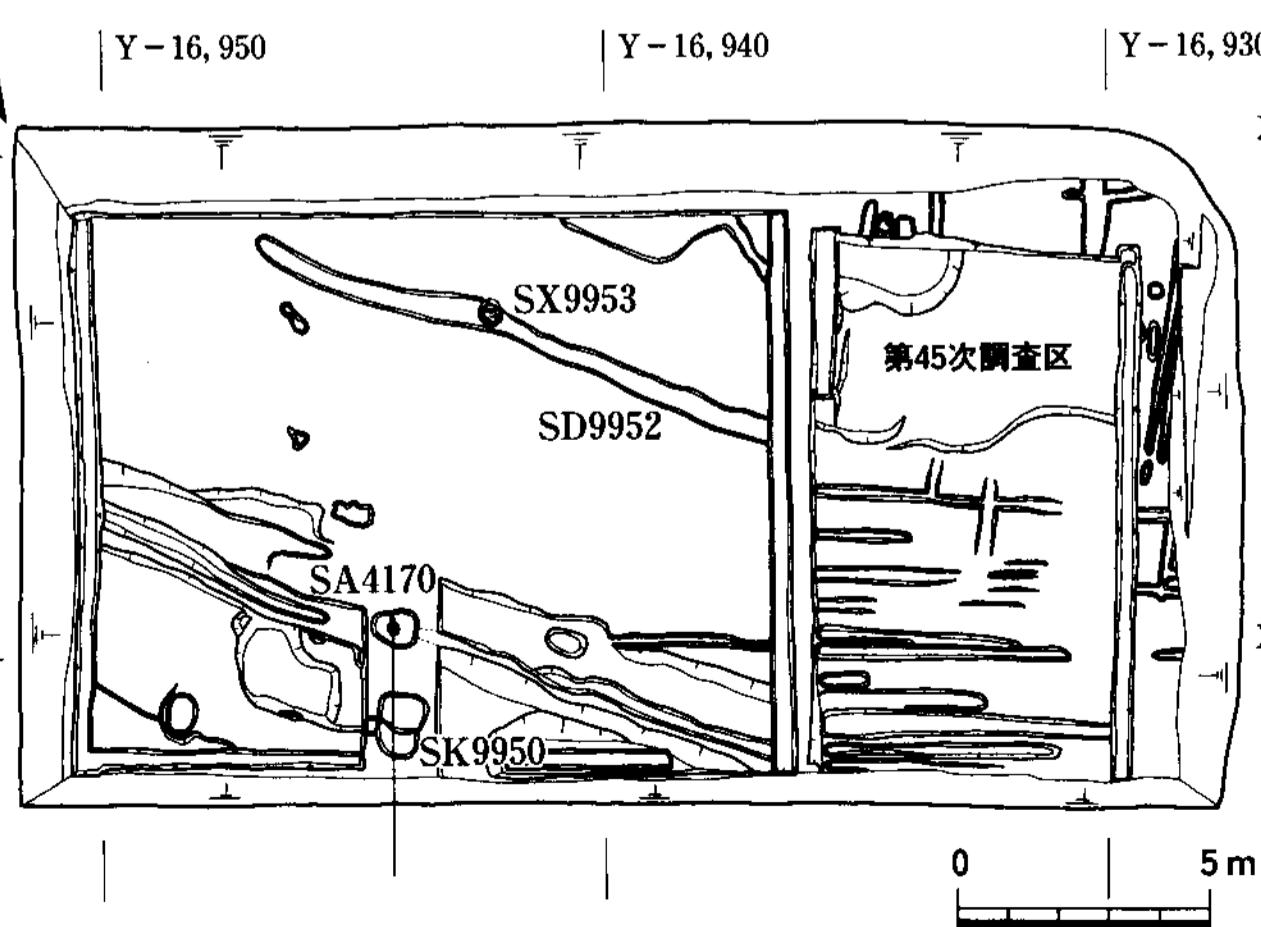


図95 第133-7次調査遺構図 1:300

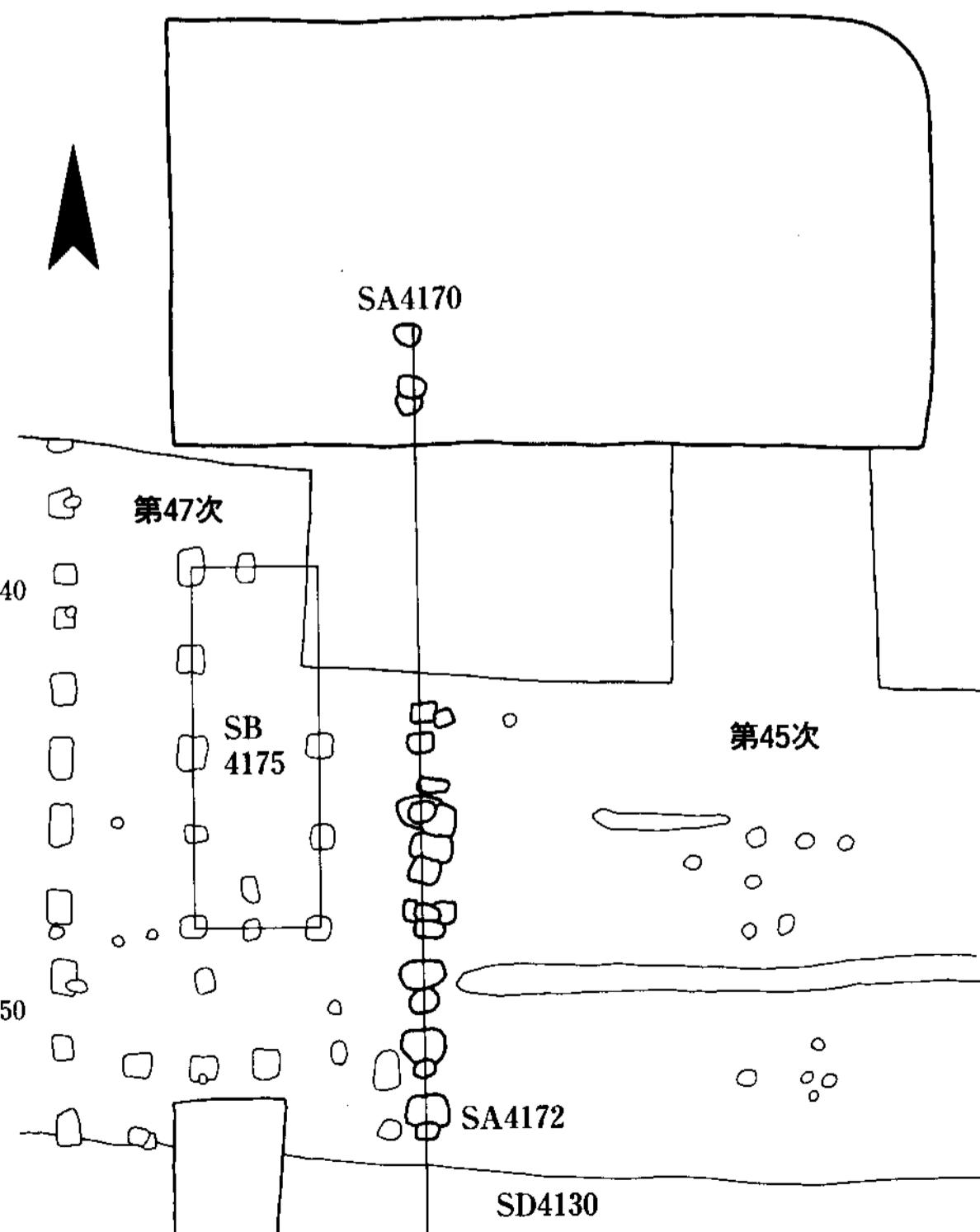


図96 調査地周辺遺構図 1:400